

## J. W. ウォーターハウス《ユリシーズに杯を差し出すキルケ》におけるキルケ像の分析 —ヴィクトリア時代の絵画における鏡の図像学をめぐって—

若名 咲香(上智大学)

ヴィクトリア時代後期に活躍したイギリス人画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス(1849～1917)は、1891年ニュー・ギャラリーに《ユリシーズに杯を差し出すキルケ》を出品した。古典の一場面を取り上げたこの作品では、魔女キルケが英雄ユリシーズに、魔法の薬を飲ませようと杯を差し出す場面が描かれている。

19世紀のイギリス美術においてキルケ像は、男性を破滅に導く宿命の女、いわゆるファム・ファタル的な性格を濃厚に漂わせて描かれてきた。キルケはユリシーズを豚に変身させようとする魔女であることから、男性を脅かす女性像としての側面に注意が向けられてきたのである。そのため先行研究でも、《ユリシーズに杯を差し出すキルケ》のキルケ像は、ファム・ファタルとして解釈されてきた。

しかし、従来ほとんど論及されてこなかった円形の鏡に着目すると、先行研究が捉えてきたキルケ像とは大きく異なる、ウォーターハウス独自のキルケ像が明らかになってくる。鏡のモチーフは素描の段階から採用されており、ウォーターハウスがキルケ像を描くうえで重要視したことがわかる。また、キルケを描いた同時代のイギリス絵画では鏡は登場していないため、鏡のモチーフはウォーターハウス独自のキルケ像の形成に重要な役割を果たした可能性が高い。

そこで本研究では、まず素描から油彩画までの過程を分析しつつ、鏡を描いたウォーターハウスの他の作品との関連性を追究する。さらに同時代の他の画家たちによるキルケ像との比較考察を通じて、ウォーターハウス作品のキルケ像が、ファム・ファタルという一元的なイメージに留まらない多層的なイメージを映し出していたことを示したい。そして鏡は、それらのイメージを反射させる重要な装置として機能してもいた。

1842年にナショナル・ギャラリーに収蔵されたヤン・ファン・アイクの《アルノルフィニ夫妻の肖像》(1434)は、画家自身とその視線を画中に同居させた作品として、19世紀のイギリス人画家たちに強い影響を与えた。とりわけ、ホルマン・ハントによる挿絵《レディ・オブ・シャーロット》(1857)では、鏡を描くことで欲望する者とされる者という男女の二項対立が描かれており、《ユリシーズに杯を差し出すキルケ》との繋がりがみられる。

しかし、ウォーターハウス作品のキルケと鏡像のユリシーズの間には、さらに複雑な関係が生じている。キルケを見つめるユリシーズの姿を鏡に映すことで、キルケに向けられた男性の視線が、画家や鑑賞者の視線とも重なっていく。鏡は、画面には描かれていない人物を鏡像として示すと同時に、我々の現実をも反射しているのだ。そしてキルケもまた、男性／画家／鑑賞者と向き合う多層的な女性像としての姿を露わにする。このように、鏡のモチーフを分析の糸口とすると、《ユリシーズに杯を差し出すキルケ》における複雑なキルケ像が明らかになるのである。